『行人』考察

――二郎の〈いま〉――

曽我理恵

一、

『行人』（大正元年十二月六日より二年十一月十五日、東京・大阪両朝日新聞にて発表）は回想形式の小説である。作者は回想という手法を作品中にしばしば取り入れる。方法としての回想の利点は、「……昔の事を回顧してると公平に書ける。それから昔の事を批評しながら書ける。善い所も悪い所も同じやうな眼を以て見て書ける。……あの書方で行くと、ある仕事をやる動機とか、所作なぞの解剖がよく出来る」（『坑夫』の作意と自然派伝奇派の交渉」明治四十一年四月『文章世界』）点にあると述べている。『坊っちゃん』や『坑夫』、『こゝろ』も一見すると現在進行形のようだが語り手の回想である。『行人』もまた「友達」「兄」「帰つてから」「塵労」の四章より構成された回想の小説である。しかし第三章「帰つてから」を執筆中に作者の胃潰瘍が再発、神経衰弱も重なり二年四月八日から九月十五日にかけて約五ヵ月の中断を余儀なくされた。当初は「左して長いものではないから単行本として出版の時に書き添へる積でゐましたが……」（「行人続稿に就いて」九月十五日朝日新聞）とあるように「帰つてから」の章で完結予定であったらしい。この中断期に作者の構想が変更され、終章「塵労」との間に一種の亀裂が生じたのではないかとも言われている。しかし「塵労」が起稿時に構想されていたか否かは問題ではあるまい。作者が完成した一作品として『行人』を発表した以上、互いの章は繋がりを持ち、各々を支え合っていると捉えるべきではないだろうか。また語り手にとっても「塵労」の約半分を占める「Hさんの手紙」の存在は、回想の契機として必要不可欠なものと思われる。よって「塵労」の章が加わることにより小説『行人』は成立したと言えよう。

しかし中断があったことは無視できない事実である。それにより『行人』には二種の回想の物語が構想されたとも言えるのである。語り手が中断以前に回想の契機たる「Hさんの手紙」を読んでいないとしても、既に「帰つてから」以前の章には二郎の自省の言葉が見える。本来「Hさんの手紙」を回想の契機と捉えるには、語り手は必ずそれを読んでいることになる。しかし、それが小説中断以前においては、語り手が読んだとは言えない。ならば最初と現行の物語とでは、文脈としての語りはいったん途切れたことになるのだろうか。

『行人』全編通して作中の語り手としては二郎が担っていると言えるが、「塵労」の中盤で二郎からHさんへと語り手は交替する。作品は「Hさんの手紙」で結ばれ現在の二郎の言葉は途中で消えてしまう。何故なのか。二人共通の語る対象は二郎の兄一郎についてであり、作者の書こうとした焦点は一郎の苦悩であった。ところが「帰つてから」に多少加筆することだけでは、作者が最も書き込みたかった一郎の苦悩を充分に展開することができないと判断した。またそれを語らせるには当時の二郎では作品構成上、不自然だったのである。

何故なら一郎からその苦悩の訳を聞かされた時二郎は、「他の心」は学問や研究で解るものではない。「身体が離れてゐる通り心も離れてゐる」。それを「超越するのが宗教」ではないのかと問い返す。一郎は「考へる丈で誰が宗教心に近づける。宗教は考へるものぢやない、信じるものだ」、「あゝ己は何うしても信じられない。たゞ考へて、考へて、考へる丈だ。二郎何うか己を信じられる様にして呉れ」（「兄」二十一）という。「彼の態度は殆ど十八九の子供に近かつた。自分はかゝる兄を自分の前に見るのが悲しかつた。其時の彼はほとんど砂の中で狂ふ泥鰌の様であつた」としか一郎の苦悩を見ることができなかった二郎には役不足であった。

そこでHさんという人物の眼を借りて、二郎にそれを伝える形をとったと考えられる。その人の報告でこの作品は結ばれている。二郎によって語られる部分と、Hさんによって語られる部分の焦点は共に、一郎が発した悩みであり問いである。故に『行人』全体は根底では繋がっていると考えられる。一郎がHさんに発した問いは、「君の心と僕の心とは一体何処まで通じてゐて、何処から離れてゐるのだらう」（「塵労」三十六）という彼の日常生活を占領してやまぬ「人から人へ掛け渡す橋はない」のかという心の苦痛である。これらの問題意識は、すでに「兄」の章で二郎に向けられていた。つまり作者の意識内ではテーマは継続していたと考えられる。従って中断の如何にかかわらず、作品としても一貫性があるといえるのではないだろうか。

作中には回想する現在と過去の二種の時間に加え、語られない空白の時間の三様の〈時〉がある。同様に各々の〈時〉にある各々の二郎の顔が存在するという事も確認しておきたい。次作『こゝろ』の場合、現在と過去そしてその間の空白の時間の区別を明瞭に読み取ることができる。ところが『行人』はこの時間自体の存在が曖昧なため、回想が活かされているとは言いがたい。

また読者は回想体を読むとき、そこには語り手の背景――語らせる必然がある筈だと思い、作中にそれを探す。しかし『行人』には少なくとも決定的な何かを読み取ることはできない。つまり現在にいたるまで書かれている以上の事は何も起こっていないと思われるのである。とすると、語り手は何故語るのかという問題に立ち返る。

内田道雄氏[1]は、『行人』が語られる「主な要因はHさんの手紙が彼の内部に及ぼした波立ちである」。「Hさんのことばは受信者への問いかけと批判性に満ちて」いるという。さらに、「二郎という語り手のことばはこの手紙の発信者たる『Hさん』その人を聴き手として形成されていったもの」であり、「この点はこの物語の形式の

根幹をなす」という対話性の指摘をしているが、果たしてどうだろうか。「Hさんの手紙」が彼に及ぼした「波立ち」こそが、『行人』が語られる、主たる要因という点については保留し、これについては最後に触れることとして、『行人』が回想形式である以上、語り手には回想しなくてはならぬ理由があると言えよう。Hさんを聴き手とするならば、手紙以後どうなったかという報告が書かれていなければなるまい。あるいはまた、宇佐見毅氏[2]は、この作品は語り手自身の「〈免罪符〉としての告白」であり、「『懺悔』という衣を纏った自分自身のための〈物語〉」だと規定する。だが〈免罪符〉という捉え方をすれば、語り手自身の慰謝の為だけの回想ということになろう。それは作者の意図するところではあるまい。回想とはあくまで過去にあったことを顧み、その当時の自分自身の心の内をたどり直し検証する事ではあるまいか。そこには当時発せられなかった言葉（声）の回復がある。過去のその時何を思い何を言いたかったのか。さらにそれらが今（現在）どのように自身の心の内に位置づけられているか。その上でこれから（未来）どうしたらよいのか。回想とは過去から現在、さらに自分自身の未来への問い掛けであると思われる。

「塵労」の前半は、前三章をさらい直す感じがある。後半は「Hさんの手紙」が占める。この手紙は独立した章から書き出されている訳ではない。注目すべきは「手紙は下のやうに書いてあつた」とあるように、あくまで二郎の語りの内に手紙が引用されていることである。『こゝろ』の先生の遺書のように独りの人間の人生をありのままに見せ教訓を与えるのが目的ではない。にもかかわらず作者がこの手紙を作中に組み込んだ意義は、二郎に及ぼす影響を意図してのことと考えられる。そして小説の展開は語り手を回想の契機へと促す。ところが回想者たる二郎がこの手紙をどのように感じ、受けとめたかという手紙読後が語られない〈空白〉のままなのである。それを作中に模索するところから二郎の現在を考察してみたい。

前述したようにこの作品を完結された一作品と見、また回想であることを鑑みれば、『行人』という作品自体においても、また作者にとっても、「Hさんの手紙」は重い意味を持つ存在である。何故ならこの手紙こそ、語り手に身の処し方を悟らせる道標となるからである。

二、

自分は親身の子として、時たま本当の父や母に向ひながら嘘と知りつゝ真顔で何か云ひ聞かされる事を覚えて以来、世の中で本式の本当を云ひ続けに云ふものは一人もないとあきらめてゐた。

（「兄」四十一）

当初の二郎は、何故かと疑問視する以前に諦める男であった。この点に「必ず甲か乙かの何方かでなくては承知できない」、諦めない人間一郎との差がある。これはまた〈諦め〉によって均衡を保つ一般人と、一郎との差としても浮びあがってくる。そして諦める人は、引き替えに物事に深く食い入ることができない。最も顕著に表れているのが、一郎の「お直は御前に惚れてるんぢやないか」に始まる一連の論議である。

一郎の悩みは「他の心が解るか」に尽きると思われる。「最も親

しかるべき筈の人」妻直の「スピリット」が摑めない、「其心になつて見る事は出来ない」ことから苦しみが始まっている。対して二郎は最初から「他の心なんて、いくら学問をしたつて、研究をしたつて、解りつこない……親しい親子だつて兄弟だつて、心と心は只通じてゐるやうな気持ちがする丈で、実際向ふと此方とは身体が離れてゐる通り心も離れてゐるんだから仕様がない」と考える人間であった。過去の二郎はこの一郎の心持ち、その苦悩を到底理解できず、「下らない事」（「兄」十九）「余まり馬鹿らしい」「必要がない」（同二十四）として片付けてしまっていたという。

ところが一郎夫妻の危機「其原因が第一不審であつた」（同十四）二郎を、はからずも一郎のたっての頼みで直と行った和歌山の嵐の一夜が変えた。「此吹き降りぢや寐様にも寐られない」という直は「大水に攫はれるとか、雷火に打たれるとか、猛烈で一息な死方がしたい」といつになく激しく、「ロマンチツクな言葉」を発する。二郎が「本にでも出て来さうな死方」と言うと、彼女はさらに「嘘だと思ふなら、是から二人で和歌の浦へ行つて浪でも海嘯でも構はない、一所に飛び込んで御目に懸けませうか」（同三十七）と益々昂ぶった言葉をはく。この夜、二郎は直に翻弄されている己れに気付きながらも、「不思議な事に……愉快でならなかつた」（同三十八）。しかし直という「嫂の正体は全く解らない」。「兄自身も自分と同じく、此正体を見届けやうと煩悶し抜いた結果、こんな事になつたのではなかろうか。自分は自分が若し兄と同じ運命に遭遇したら、或は、兄以上に神経を悩ましはしまいかと思つて、始て恐ろしい心持ちがした」（同三十九）という思いがけない感想を持つに至る。にもかかわらず、直への同情から「腕力に訴えてでも嫂を弁護する気概」を起こし、一郎が知りたがっている「嫂さんに就いて」の報告協力を、「貴方の頭にある幻」は「何処にも存在してゐない」と誤魔化してしまった。

自分は彼に対して怒り得る程の勇気を持つてゐなかつた。怒り得るならば、此間罵しられて彼の書斎を出るとき、既に激昂してゐなければならなかつた。自分は後から小さな石膏像が飛んでくる位に恐れを抱く人間ではなかった。けれどもあの時に限つて、怒るべき勇気の源が既に枯れていたやうな気がする。自分は室に入つた幽霊が、ふうと又室を出る如くに力なく退却した。其後も彼の書斎の扉を叩いて、快よく詫まる丈の度胸は、何処からも出て来なかつた。（「帰つてから」二十五）

当時の二郎がこの一件で「詫ま」ろうと思ったのは「虚偽な自白」に潜んでいた自己の作為に対してであり、一郎の事を真剣に考えてはいなかったことに対する反省からではなかった。

そして「此間罵られ」た時に怒れなかったのは、その時点では二郎は一郎に対し、怒るだけ無駄な相手だと捉えていたからではないだろうか。二郎は一郎から、自分と直についての疑惑がどこに端を発するのかを説明されていないのである。一郎にしたところで実証のない疑惑は説明できまい。また一郎側から見ても、父の盲目の女に対する軽薄さに涙したことを説いた上で、尚且つ父同様の「虚偽な自白」を聞かされたとあっては、「力も張りも」ない声になろう。二郎に失望したのであり、真に一郎のことを考えていないことがわかったのである。「軽蔑して呉れるな」「何ぞ堪忍して呉れ」と言っ

た頃の一郎はまだ、確かに二郎との絆が自身の疑惑によって断ち切られることを恐れていた。しかしここにきて遂に一郎もまた二郎という人間を見切る他なく、一郎の求めに対する二郎の報告が、互いが互いを見切っていく結果を招くことになる。ついに、二郎は長野家から離れていくこととなる。

長野家において、「平生食卓を賑やかにする義務を有してゐると迄、皆なから思はれてゐた」二郎が沈黙し始める。「当分気を抜こう」と家を出たが、「下宿にゐて余り孤独なため」「自分こそ近頃神経過敏症に罹つてゐるのではなかろうか」と自問するようになる。そこへ直の突然の訪問。彼女は一郎との仲が芳しくないことを告げ「気不味さの近因に就いては遂に一言も口にしな」い。「焦慮される為に彼女の訪問を受けたと同じ事であつた」と思う二郎は、以後ますます直に対する認識をあらたにし、「一人の兄嫁を色々視」るようになる。その頃二郎は、

かうして自分で自分を離れた気持ちを持ちながら、上部だけを人並に遣つて行くのに傍の者は何故不振がらないのだらうと疑つてみたりした。自分は余程前から事務所ではもう快活な男として通用しない様になつていた。ことに近来は口数さへ碌に利かなかつた。それでこの三四日間に起つた変化も亦他の注意に上らずに済んでゐるのだらうと考へた。さうして自己と周囲と全く遮断された人の淋しさを独り感じた。（「塵労」六）

「自己と周囲と全く遮断された人の淋しさ」とは、一郎の言う「他の心が解るか」という想いに通じるのではないか。ここに及んで二郎の視点は次第に一郎のそれと重なってゆく。この時二郎は一郎の孤独の幾許かを体感したであろう。もはや一郎の問題は二郎自身の問題となってくる。しかし、一郎の苦悩の解消というそもそもの目的が、一郎的思考では打開できぬとすれば、ここにHさんという第二の語り手の登場が必然となる。

三、

二郎はHさんに一郎と共に旅行してくれるよう依頼する。その上、旅行中の兄一郎の様子を知らせて欲しいと頼む。当時の二郎にとってHさんという人物は、一郎の同僚であると共に、彼の叔父は勤務先の持ち主であり、三沢の保証人でもあった。直接の面識のない相手に一郎を託したのは、長野家にとって「恐ろしいX」（「塵労」十二）である一郎の未来の方向転換のためであった。しかし二郎がHさんに手紙を要請したのは、

……真底を自白すると、自分の最も苦に病んでゐるのは、兄の自分に対する思はくであつた。彼は自分をどう見てゐるだらうか。どの位の程度に自分を憎んでゐるだらう、又疑つてゐるだらう。其処が一番知りたかつた。（「塵労」二十一）

からである。しかしそこに問題がある。

それを知るために、此際Hさんの助けを借りやうとすれば、勢ひ万事を彼の前に投げ出して見せなければならなかつた。自分が三沢に何事も云はずに、恰も彼を出し抜いた様な態度で、たつた一人かうしてHさんを訪問するのも、実は其用事の真相を成るべく他に知らせたくないからであつた。然し三沢に対してさへ、良心に気兼をするやうな用事の真相なら、それをHさ

んの前で云はれる筈がなかつた。

自分は己を得ず特殊な問題を一般的に崩して仕舞つた。

「甚だ御迷惑かも知れませんが、兄と一所に旅行される間、兄の挙動なり、思想なり感情なりに就いて、貴方の御観察になつた所を、出来る丈詳しく書いて報知して頂く訳には行きますまいか。その辺が明瞭になると、宅でも兄の取扱上大変便宜を得るだらうと思ふんですが」　（「塵労」二十二）

Hさんに「特殊な問題」について言い出せなかったのは、一郎の現状が、二郎と直の関係を疑うことに起因しているとばかり考えていたからであり、さらに言えば一郎の名誉の為でもあった。「あの事件以後何うかして兄と故の通り親しい関係になりたいと心では希望してゐた」（「帰つてから」三十七）という。しかし一郎を心配する以前に、自分がどう思われているかという考えが先立つ限り、一郎の苦悩の解消以前に、彼にその下心を見透かされ到底受け入れられまい。ところが「特殊な問題を一般的に崩し」た結果、意想外の結果を呼ぶこととなる。ここで「Hさんの手紙」が活きてくる。

四、

Hさんは、この手紙の価値は「私の見た兄さん」と「貴方方の見た兄さん」を「違つた角度から、同じ人を見て別様の反射を受けた所にある」。それを一郎の未来にかかわる時の「参考になさい」（「塵労」五十二）と呼び掛けている。またHさんが二郎に手紙を読むにあたっての姿勢を説いた一節がある。

……貴方と私とは丸で専門が違ひますので、私の筆にする事が、時によると変に物識りめいた余計な云ひ草のやうに、貴方の眼に映るかも知れません。……是でも必要と認めない限り、成るべくそんな性質の文字は、省いてゐるのですから、貴方も其積で虚心に読んで下さい。少しでも貴方の心に軽薄といふ疑念が起る様では折角書いて上げたものが、前後を通じて、何の役にも立たなくなる恐れがありますから。　（「塵労」三十九）

「虚心」に読めとは、先入観を捨てろということだろう。一郎のために無私の心で読んで欲しいというHさんの願いが込められた言葉である。何よりこの長文の手紙は、依頼者二郎のためでなく、「親愛するあなたの兄さんのため」に書かれたものであった。ところが二郎には「兄から今どう見られてゐるか」という思いばかりがその心を占めていた。そうして「Hさんの手紙」を読んだ二郎は、Hさんと自身との差は、一郎への姿勢であったことを悟ることになる。

当時の二郎が「Hさんの手紙」を読んだ折の一番の衝撃は、兄にとって「僕の事」が話題とならなかったことである。

不思議な事に兄さんはこれ程鮮明に自分が細君に対する不快な動作を話して置きながら、その動作を敢てするに至つた原因に就いては、具体的に殆ど何事も語らないのです。……従つて兄さんの家庭には何んな面倒な事情が縺れ合つてゐるか、私には頓と解りません。好んで聞くべき筋でもないし、又聞いて置かないでも、家庭の一員たる貴方には報道の必要のない事と思ひましたから其儘にして済ましました。たゞ御参考迄に一言注意して置きますが、兄さんは其時御両親や奥さんに就いて、抽象的ながら云々されたに拘はらず、貴方に関しては、二郎とい

ふ名前さへ口にされませんでした。それからお重さんとかいふ妹さんの事に就いても何にも云はれませんでした。

（「塵労」三十七）

「自分に誠実でないものは、決して他人に誠実であり得ない」と断言する一郎自身は、二郎への嫌疑をHさんに告白してはいなかった。一郎は何故話さなかったのか。この〈何故〉が、一郎への認識を改めるきっかけとなるのである。

Hさんは一郎の苦悩は「絶対の境地」を会得できないところにあるという。

一度此境界に入れば天地も万有も、凡ての対象といふものが悉くなくなつて、唯自分丈が存在するのだと云います。……即ち絶対だと云います。さうして其絶対を経験してゐる人が、俄然として半鐘の音を聞くとすると、其半鐘の音は即ち自分だといふのです。……絶対即相対だといふのです、従つて自分以外に物を置き他を作つて、苦しむ必要がなくなるし、又苦しめられる掛念も起らないのだと云ふのです。（「塵労」四十四）

しかも一郎は「僕の世界観が明らかになればなる程、絶対は僕と離れ」る「矛盾を知りながら、依然として藻掻いてゐる」のだと言う。こうして「何うしたら此研究的な僕が、実行的な僕に変化出来るだらう」（同四十五）と訴える一郎を前にしたHさんは、二郎に向けて切実に書き送る。

兄さんは幸福になりたいと思つて、たゞ幸福の研究ばかりしていたのです。所がいくら研究を積んでも、幸福は依然として対岸にあつたのです。

（「塵労」三十九）

私は……何でも構はないから、兄さんの心を悉皆奪ひ尽して、少しの研究的態度も萌し得ない程なものを、兄さんに与えたいのです。さうして約一年ばかり、寸時の間断なく、其全勢力の支配を受けさせたいのです。兄さんの所謂物を所有するといふ言葉は、必竟物に所有されるといふ意味ではありませんか。だから絶対に物から所有される事、即ち絶対に物を所有する事になるのだらうと思ひます。神を信じない兄さんは、其処に至つて始めて世の中に落付けるのでせう。（「塵労」四十八）

しかし一郎を「世の中に落付」かせる事ができるのは、Hさんではあるまい。Hさんは、一郎の「将来に就いて……明瞭な知識を得たい」と望まれても、「その問題には誰も答へられない」という。他人であるHさんは、二郎と一郎とを隔てる「一種特別な関係」（「塵労」二十二）を知らない。しかもこの旅行自体に長野家の人々の意志が働いており、一郎もまたHが守り役だと看破しているのだとすれば、この上は全てを知っている筈の二郎に託す他ないのである。ただ一切をあるがままに報告し、問題を再び二郎のもとに返す他ない。

五、

さて〈Hさんの手紙〉に二郎は何を読み、感じ取ったか。Hさんが伝えたのは、一郎の苦悩の有様の詳細な報告と、このままでは「悲しい事が出来るかも知れ」ないということである。問題は二郎のもとへ返された。作者がHさんの報告という形式で一郎の言葉を伝えたのは、あくまで二郎自身の問題として解決を探す姿勢を打ち出し

たかったからと思われる。

私は断言します。兄さんは真面目です、決して私を胡麻化さうとしては居ません。私も忠実です。貴方を欺く気は毛頭ないのです。

（「塵労」五十二）

Hさんが最後に二郎に投げ掛けた言葉である。

Hさんは長野家の人々の前で、自身がまだ二郎に「愛想を尽かされてゐないといふ事を明言出来る」のは、「一種の弱点」のある一郎を「今でも衷心から敬愛してゐると固く信じて疑はない」（同四十六）からだという。この言葉をもってHさんは二郎に、私のように一郎を敬愛し信じる心がありますかと問いかける。さらに「兄さんは真面目です」「私も忠実です」と書き継ぐ。あなたは真面目ですか、あなたは忠実ですか。と二郎はHさんの手紙から問いかけられる。言い換えれば、貴方に誠の心はありますか。その覚悟ができていますか。と問いかけられたのである。その覚悟がなくては一郎には近づけませんよという助言でもあったのではないだろうか。この問いかけによって二郎は、過去における一郎への自身の不実に強い後悔が生まれ、そして深く懺悔する。一郎に対して「忠実」ではなかった己れに気付いたのである。

自分は此時の自分の心理状態を解剖して、今から顧みると、兄に調戯ふといふ程でもないが、多少彼を焦らす気味でゐたのは確かであると自白せざるを得ない。……自分は今になつて、取り戻す事も償う事も出来ない此態度を深く懺悔したいと思ふ。

（「兄」四十二）

自分から斯ういふと兄を軽蔑するやうで甚だ済まないが、彼の表情の何処かには、といふよりも、彼の態度の何処かには、少し大人気を欠いた稚気さへ現はれてゐた。今の自分は此純粋な一本調子に対して、相応の尊敬を払ふ見地を具へてゐる積である。けれども人格の出来てゐなかつた当時の自分には、たゞ向の隙を見て事をするのが賢いのだといふ利害の念が、斯んな問題に迄付け纏はつてゐた。

（「兄」四十三）

二郎が真に後悔していることとは何か。兄一郎の悩みを他人事として真面目に受けとめていなかったことである。二郎にしてみれば直との関係において何らやましい事はないという自負心があった。従って一郎に対して尊敬より軽蔑の気持ちが勝ったことは否めない。一郎にしてみれば、二郎の存在そのものが不安の対象であった。妻直と弟二郎の他意のない会話や動作でさえ、一郎の心には大きく立ちはだかって不安にさせる。ならば長野家を出て下宿した二郎の存在は一郎の神経を落ち着かせたか――。否。事態は変わらなかったのである。実のところ、二郎と直の間には何も起きてはいない。しかし二郎が直と何も秘密を持たなかったとしても、長野家という一つ屋根の下に暮らしていた事は事実である。また兄一郎より先に嫂直を知っていたのも事実である。さらに又、家族は皆困ると二郎のもとへとやってくる。語り手である二郎は一見無個性に見える。が、各々の登場人物を通して彼の姿を視ることができる。一郎の眼を通して見た二郎は、許してくれる人であり、恥ずかしい頼みごとのできる奴である。三沢の眼を通して見た二郎は、金の工面も頼める。その上「病気になるときつと呼びたくなる」奴でもある。直にとつても慰めを得る二郎であった。彼のもとへは父も来る、母も来

る。いわばみんな二郎詣りをする。彼には柔軟な、やさしい心がある。二郎をあてにする人々は、二郎当人が自覚していない無意識の〈素〉な性格的良さをみている。言い換えれば、素直な人の前ではこちらも素直に自己をさらけ出すことができる。しかしながら、この二郎の性格に彼自身が思いもよらなかった〈存在〉の責任があった。彼にしてみればいわれない責任である。一郎は家長であり長男でありながら、その性格とあいまって家族に遠慮され敬遠されてしまう。なまじ身近に二郎という家族のすべてにとって心やすい人間がいるだけに尚更であった。結果として一郎のもとへは家族の問題は持ち込まれないことになる。書斎の人として以外、存在価値も薄い。しかも一郎の「最も親しかるべき筈の人」直は、二郎からすれば兄よりも「却って心置なく話」ができる相手なのである。神経の鋭敏な一郎の孤独感は深まるばかりである。回想する現在の二郎は、己れの存在が一郎の精神を追い詰めていた事を気付かなかったという自責から生じた強い懺悔の念を持つならば、二郎は、Hさんの手紙に暗示された「悲しい事」を回避するためにはどうしたらよいのか。二郎は真面目に我が身の処し方を考えた筈である。二郎と一郎の間に横たわる「特殊な問題」は、言葉の力では乗り越えられない類いのものである。時すでに遅しである。ここで思い出されるのは、作中随所に見られる〈研究する〉という態度（言葉）である。

「君でも一日のうちに、損も得も要らない、善も悪も考へない、たゞ天然の儘の心を天然の儘顔に出してゐる事が、一度や二度はあるだらう。僕の尊いといふのは、其時の君の事を云ふのだ。其時に限るのだ」

……其時の私は前云つた通りです。たゞ煙草をふかして黙つてゐた丈です。私は其時凡ての事を忘れました。独り兄さんを何かして此不安の内から救つて上げたいと念じました。けれども私の心が兄さんに通じやうとは思ひませんでした。又通じさせやうといふ気は無論ありませんでした。だから何も云はずに黙つて煙草を吹かしてゐたのです。然し其此に純粋な誠があつたのかも知れません。兄さんは其誠を私の顔に読んだのでせうか。

（「塵労」三十三）

このHさんの言うところは、つまり研究しないこと、である。これはまた次作『こゝろ』に通底する。「あなたは本当に真面目なんですか」「あなたは腹の底から真面目ですか」（「先生と私」三十一）と先生は問う。語り手の〈私〉は振り返る。「然し私は先生を研究する気で其宅へ出入りをするのではなかつた。私はたゞ其儘にして打過ぎた。今考へると其時の私の態度は、私の生活のうちで寧ろ尊むべきものゝ一つであつた。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際が出来たのだと思ふ」（同七）と。この言葉はそのまま、先のHさんの言葉に繋がる。しかし「純粋な誠」を持ったHさんは「悲しい事が出来るかも知れない」と一郎の精神状態を憂いている。もはや二郎は「純粋な誠」だけでは一郎の精神を救うことはできない事態に追い込まれてしまったのである。二郎はここに至って、己れ自身が行動を起こさねばならない決断に迫られたと言えよう。一郎は自身の求める「絶対の境地」には矛盾があることを知っている。残る道は一郎の願いでもある「実行家」になる助けを密かにすることだろう。それには「心を悉皆奪ひ尽して、少しの研究的態度も萌

し得ない程なもの」を与えることである。「家庭の兄」が「研究的な兄を生み出した」ならば、「家庭の兄」を変えることから始めるしかない。一郎を取り巻く環境を変えるのである。それには、二郎自身が長野家の生活圏から去る決断をする以外あるまい。下宿をして一つの屋根の下に居なくとも、父母も、妹や直さえも訪ねてきてしまう距離では意味をなさない。長野家の人々と日常的に交流を持てない別の生活圏に身を置くことである。そうすれば今迄二郎の所へきた相談も視線も、自然と一郎へ向っていくのではないか。少なくとも日常における二郎の存在は薄れる筈である。しかし一郎を納得させられる相応の理由のもと、円満に長野家から去らなければ意味をなさない。そこで理由として作中より考えられるのが、二郎の留学、結婚、転職である。留学は自力では無理のようだし、結婚は兆しはあるものの未定である。例として考えられるのは「御気に入つたら、貴方も大阪に入らつしやいませんか」(「友達」二十二)、「大阪の岡田から受け取つた手紙の中に、相応な位置が彼地にあるから来ないかといふ勧誘があつたので、ことによつたら今の事務所を飛び出そうかと考へてゐた」(「塵労」二十四)という作中の一節が転職の理由になるのではないかとも推測される。生活圏から離れた、しかし長野家にとって縁のある大阪に二郎が転職することは、二郎が一郎に対してでき得る最大の誠の形であろう。大阪に限らずとも、遠く離れた地に行き、自らの存在を長野家の人々の視野から消すことを二郎は決断したと思われる。

また円満に東京を去った根拠としては、現在の二郎とお重の間に交流があることが挙げられる。

自分は今でも雨に叩かれたやうなお重の仏重面を覚えてゐる。お重は又石鹸を溶いた金盥の中に顔を突込んだとしか思はれない自分の異な顔を、何うしても忘れ得ないさうである。

(「帰つてから」九)

仮に一郎に「悲しい事」が起きていたなら、一郎思いのお重には、二郎がその原因と目され断絶状態になると思われる。また実家であっても「冷かな兄嫁からふんといふ顔付で眺められるのが何より辛かつたらしい」(同十)ことなどを二郎が知っているところからも、この兄妹には現在も付き合いがあると言えよう。「塵労」以後が空白として残され語られないのは、「Hさんの手紙」から己れの立場と身の処し方を理解した当時の二郎が、一郎のために彼の帰京以前に決断を実行し、東京を去ったためと思われる。

現在の二郎には、回想した過去の長野家に暮らしていた頃の一郎と真剣に向き合っていたなら、兄との親しさを失うこともなく、また故郷を去る必要もなかったという寂寥感があろうと推測される。と同時に現在も過去も一貫して「一郎と故のような親しい関係に戻りたい」(同三十七)という願望があると思われる。そうしてその願望を未来への糧として、〈いま〉を生きる二郎の姿が推測される。

最後に蛇足ながら一言つけ加えれば、内田道雄氏のいう「Hさんの手紙」こそが二郎の自省、懺悔の要因であるという点は、最初の構想に「塵労」、つまりは「Hさんの手紙」が用意されていなかったとすれば、やはり問題であろう。確かに作品としては内田氏の言うごとく読めるとしても、その中絶を含む作品形成の過程を見れば、「Hさんの手紙」によって二郎の回想に含まれる内省、懺悔の意味

がよりはっきりと跡付けられるという、作家の意図によるものだということは、中絶前後という事態をふまえた上で触れておくべきことだろう。この意味においても『行人』という作品自体に主題の亀裂、断絶があったとは言えないであろう。

（1）内田道雄「『行人』の語り手と聴き手」（『古典と現代』平成元・九、後に「漱石作品論集成第九巻『行人』所収、桜楓社）

（2）宇佐見毅「『行人』――〈免罪符〉としての告白」（『中央大学文学部紀要』平成四・二）

付記　本稿は、日本近代文学会北陸支部平成九年九月例会での口頭発表をもとに、加筆したものである。